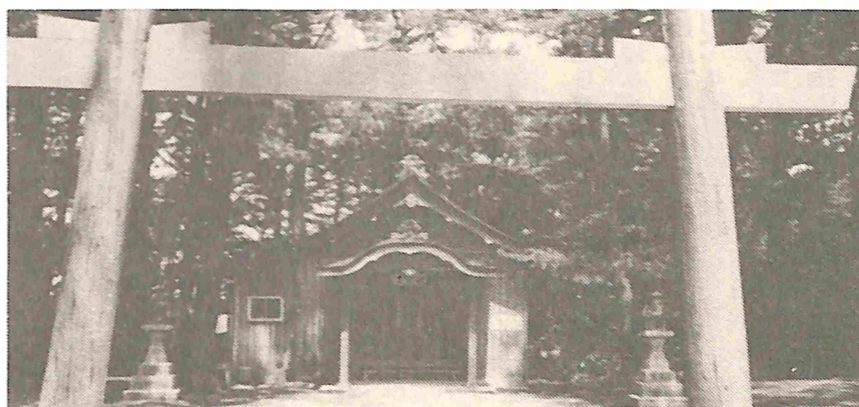


観音信仰と地藏信仰を尋ねて

津軽半島縦断踏査記(2)

木村治利



芦野観音堂

中里町尾別の宮越家を後に、国道三三九号線を北上する。初夏の強い陽ざしは、クーラーのない車内をサウナ風呂のように熱していた。

尾別には、建武年間(一三三四)の土豪として知られる乙辺地小三郎光春の館があったといわれる。又、国道三三九号線沿道には、津軽三十ヶ所観音霊場の十三番から十八番までの観音堂があり、そのほかにも観音堂や地藏堂があるところから、津軽の民間信仰を踏査してみることにした。

一、観音信仰

人間は災害や疫病などに見舞われると、宗教信仰を求める。幕藩体制のもとで産土神うぶぢいは各部落に祀

られ、壇家制度によって庶民はいづれかの宗派の寺院に所属させられていた。これはキリシタン取締りのためにできた政治的制度であり、人々の信仰心を満たしてくれなかった。

ことに江戸中期になって、世相が安定してくると、現世的な利益を求める信仰が急速にのびはじめた。それは民衆が津軽のきびしい自然条件と苛烈な生活条件の中から何かにすがらなければならぬ、やむにやまれぬ祈願の心の表われだからである。

観音信仰は、観世音菩薩は大慈大悲で衆生を救度するを本願とし、勢至菩薩と共に阿弥陀如来の脇侍である。

千手観音、如意輪観音、馬頭観音など多くの形像があるが、その本は聖観音である。

三十三ヶ所の霊場を設けてこれを巡礼する風習が民間におこなわれ、今も津軽三十三霊場めぐりはさかんである。

観音堂は多くの部落にみられるが、いづれも小高い丘の見晴らしのいい風光明媚な場所に建立され、その参道や周囲には三十三石仏観音が安置されている。

これは、観音信仰が巡礼であり、巡礼者に心の安らぎを与えるための心遣いからであろうか。

芦野の三本松

霊場めぐりには入っていないが、金木町芦野公園内の見崎町に芦野三十三観音があり、嘉瀬山にも嘉瀬三十三観音が祀られており、いづれも風光明媚の場所である。



芦野観音堂境内にある徳田伝兵衛手植の松

とくに芦野観音堂の境内にある三本の樹齡三〇〇年の老松は、史実及び古老の話によると、元禄十年(一六八八)津軽四代藩主信政公が、金木新田開発を行なったとき、多数の人夫が犠牲になったので篤く葬るべく、徳田伝兵衛総奉行が、この台地に遺骨を埋め、埋葬地の三角点に松を植え、吊ったと記してある。

(新田開拓史)

境内には、三本の老松を取囲むように、四方に老松がある。しかもその老松は台木の二メートル程

の高さから幹が二つに分れ、腰がかけられるように横にのびている。

町の郷土史家に聞くと

「この枝に立って、人夫を

監視していたのではないか」と語る。

即ち見張所ではなかったのか、北の木に登って見ると、北西に武田、南西には蒔田、神原の田圃が一望に見渡すことができた、南の木からは、藤枝溜池築堤が手にとるように眺められた。

ただの荒地に過ぎなかった津軽平野が、つぎつぎと開発され、今日の美田に変えたのも、百姓の犠牲によるものだった。

元禄時代は頻繁に凶作が起った。元禄五年(一六九二)、同六年、同七年と続き、八年(一六九五)には餓死者十万余人、空屋七千戸に達する大惨状を呈した。

しかし、信政公は新田開発を積極的に進め、元禄四年(一六九一)五所川原堰工事に着手し、延べ一万八千余人の人夫を各村々に割当て翌年に完成した。この用水路は藤崎で岩木川から取水する約二〇キロメートルにおよぶものだった。信政は五所川原堰が完成すると、休む間もなく、もっと大がかりな小阿弥堰の大工事にとりかかった。この工事には人夫が十五万八五七三人、馬が五八六頭使用されたといわれます。そして元



双幹の老松



禄十二年（一六九九）木造、金木、俵元の三新田の開発が行なわれたのです。

信政は、見廻り役の武士に「仕事を怠ける者があったら、一日三人まで斬り捨てご免の許可を与える」と命じている。徳川家康の遺訓に「郷村の百姓をば、死なぬように生きぬように合点いたして、収納を申しつけよ」とあり、百姓は米を喰うことも、酒を飲むことも禁じられ、百姓たちが開発した田圃はみんな殿様のものとなり、生産した米は何の代償もなしに取上げられ凶作となれば多数の百姓が餓死していったのです。新田開発は百姓を貧苦のどん底に落とし入れ農奴として虐げていた。

このように当時の状況から想像するに芦野の三本松の埋葬地は、身体の弱い者や怠け者の処刑場ではなかったのか。

町の郷土史家によると、境内から縄文後期の「矢じり」が発見されているといわれ、歴史的にも古い地であるように思われる。

百姓の怨念を恐れた徳田総奉行は、工事完成後観音堂を建立し弔った、と思うのは独善であろうか。

この地は、金木町雲祥寺が管理している。雑草木生え茂る中に、老松は史実を物語りたげに、淋しく松風にないていた。

#### 芦野観音御詠歌

唱ふれば、山の草木もさながらに

わがみほとけの、姿なりけり

金木新田開発工事は、元禄十一年（一六九八）から開拓に着手し、宝永二年（一七〇五）に成就した。

新田十八ヶ村とは、豊岡、今岡（福浦村）、福浦、川内（豊岡に合併）、田茂木、福井（田茂木に合併）、神原、蒔田、藤枝、芦部（藤枝に合併）、大沢内、久米田、八幡

（八懸村を深）舟岡、宮川、芦野、富野、豊島の十八ヶ村である。

#### 津軽三十三観音霊場

国道沿いの右側の小高い丘には、弘誓寺観音堂があり、参道を登って行く道端には、三十三観音石像が安置されている。三十三ヶ所霊場の十四番の観音で、川倉芦野堂（三桂神社）のつぎである。慶安二年（一六四八）に再建され、ご本尊は千手観音である。

境内からは、十三湖や日本海が遠望できた。尾別より薄市に向う、左手は十三湖千拓により造成された広々とした緑の田圃が続く、陽ざしにきらめく緑の葉をなびかせて、風が吹き渡っていた。

薄市川を渡ってすぐ右に曲り鳥居をくぐり、左手のゆるやかな鉄の段を登って行くと、樹木におおわれた境内に山神堂があり、ここの参道にも三十三観音石仏が安置されていた。

観音堂は、仕立山頂の登りつめた処に、昭和四十五年再建され、まだ新しい十五番目の薄市観音堂があった。創建は元禄元年（一六六八）と伝えられ、千手観音がご本尊である。山頂から眺める十三湖は、湖底に秘められた壮大なロマンを、いまにも語りかけてくるような思いがする。

中里町には、十六番今泉観音堂もある。興国二年（一三三一）に襲来した大津浪によって十万余の犠牲者を出し、その菩薩を弔うため、当時の為政者安東氏は唐崎山に地蔵堂を建立した。しかし安東氏は津軽為信に亡ぼされ、享保年間地蔵尊は川倉へ移されたといえられる。

寛文九年（一六六九）今泉観音堂がこの地に創建され、明治初期まであったが、明治の廃仏毀釈でご本尊千手観音菩薩は弘前最勝院へ移遷されたが、明治八年村人の強い要望で今泉山の神明宮の境内に御堂を建立

した。

十七番市浦村相内の春日内観音堂、十八番小泊村の海満寺観音堂と続くが、今泉観音堂の近くに今泉地蔵堂があるので、参詣することにした。

#### 二、地蔵信仰

国道を北へ進むうち、眼前に灰色の海のような十三湖が姿を現わした。

『やがて十三湖が冷え冷えと白く目前に展開する、浅い真珠貝に水を盛ったような気品はあるが、はかない感じの湖である。』

波一つない、船も浮んでいない、ひっそりしていて、そうしてなかなか広い、人に捨てられた孤独の水たまりである』（津軽より）。

右手は津軽半島の中央山脈につらなる山地である。下車し山の斜面の小道を登る。せみが烈しく鳴く、汗がとめどなく流れる。松やならの古木が日蔭を作り涼しくしてくれる。登りつめた高台の北端にぼつんと地蔵堂が建立されていた。御堂の前は五十アル程の広場で、六月二十三日・四日が例祭で沢山の巫女が集まり、近隣市町村からの善男善女でにぎわうといわれる。

今泉の塞の川原は享保年間（一七一六）良演上人の開基と伝えられ、地元民は川倉地蔵尊の前身であるという。

しかし、川倉地蔵堂の関係者は、川倉は恐山菩提寺の開山と同時であるという。恐山は慈覚円仁大師が、今から千二百年前延暦十三年（七九四）桓武天皇の御代に開山している。

川倉の例大祭は、旧暦六月二十三・四日で、長年に亘って旧を遵守してきたのは、この日は地蔵様の日だからである。今泉の地蔵堂は南向き

だが、川倉のお堂は東を向いており、二十三夜様が真直ぐに拜むことができる。巫女の口寄せを聞いて、一泣き泣いてゴロリ変って「ドダバ、ドダロベジ、フトゲリドダバ」と盆踊りとなる。この頃は梅雨も明け、ユカタ一枚で野原にゴロ寝できる高温の季節であり、男女の公然のデート日であった。

供物の野菜や果物も不自由しない、これが本家のしるしと主張する。

しかし、昭和五十五年（一九八〇）「近世末期における津軽北部地方の地蔵信仰の形成」について、千葉・大津両氏が過去帳による幼児死亡変動の分析から調査の結果、川倉地蔵尊は明治初期の開基と思われるとの説である。

川倉地蔵堂と敷地は金木町金木の雲祥寺の管理に属する。雲祥寺は寺伝では慶長十五年（一六一〇）の開基と伝えられ、その入口は金木部落の塞の川原であったという。いま門内に小規模の地蔵堂があり、そこにも川倉同様に金木部落の幼児の死者があると、親は地蔵像をここに納めている。地蔵像を調査の結果、川倉では明治後期以前の銘ある地蔵は認められなかった。しかし雲祥寺の地蔵堂には、幕末乃至明治初年の作とみられる素朴な木製の像がいくつか見出された。このほか塞の川原は、嘉瀬・喜良市・尾別・今泉などの古村とされる大きな集落の入口に当るところにあり、各村に存在した塞の川原の地蔵堂が、何らかの理由で大規模となったものと思われ、川倉の地蔵堂も明治初期の開基といわれる。

地蔵菩薩は、儀軌によれば八内に菩薩の行を秘し、外に比丘（僧侶）を現し、左手に宝珠を、右手に錫杖（しゃくじょう）を持し、千葉の青蓮華（しょうれんげ）に安住すといっている。地蔵菩薩の像はこれにもとづいてつくられ世に流布した。

日本でも地蔵菩薩信仰は平安後期から貴族のあいだに盛んになった。



とくに地獄の観念が一般化するにつれて、死者が冥土へいって地獄の閻羅の裁きをうけ、ひどい苦しみにあうことから救済してくれるのが地蔵だとされた。鎌倉時代にかかる頃から日本でも地蔵の姿が一定化してひろまり、現実界と冥界の境に立つて冥界へゆくものを救うという性格も強調され、阿弥陀、浄土の信仰と結びついて、民間にも浸潤していった。まず固有の道祖神信仰など境神と結びつき、村の境や辻にこれが建てられるようになった。

子どもと地蔵との関係が日本では強調され、とくに子どものために救済するとか、地蔵は童形だとかいう信仰が流布した。中世以来の伝説には子安地蔵など、地蔵が少年を救済したとの話は多い。

地蔵の文字に即して地神と結びつき、地蔵が土地に深く根をおろしたという説もある。

こうしてあらゆる民間の願望をききいれる菩薩としてひろく崇信をあたため、江戸時代には延命地蔵という類のものもできた。

その他地蔵、千体地蔵などさまざまな名を冠した地蔵はこんにちでも多くみられ、みなそれぞれのいわれをもっている。

毎月二十四日地蔵講を催すところが多いが、二十四日はその縁日とされている。これも在来の二十三夜の月待の習俗が基底となっているかと考えられる。(以下次号)

### 津軽の田面から 消えたもの(2)

稲 乳 Ⅱ 黄金に染った津軽平野の田んぼも十月に入れば稲刈がはじまる。刈り取られた稲束は、行儀よく島立となり整列する。

島立に並んでから約二週間ほど乾燥したところで今度は、集められて稲乳穂に積まれるのである。

乳穂は、その形状が若い母親の乳首のようである。だから稲盛と言わないで稲乳穂と言ったのかも知れない。

乳穂は、自然乾燥での水分の調節役と稲ワラの品質を高めてくれる。そして雪の降るまで田んぼに置いて盗難・火災の心配もない。

そのような、農村の秋の風物詩である乳穂も、農機具(コンバインやハーベスター等)の発達により津軽の田面には見られなくなった。

### あだ名での教え方

沢田 薫



嘉瀬には物知が多い。アダ名をつけるのもその一つである。或るとき或るところで、或る人が、一から十まで物を数えるに、嘉瀬のアダ名の頭をとって、実にユニークに教え終えた。私は感心して、もう一回ゆっくり教えあげてもらい書きとめておいたので、次に御紹介したい。

- 1, インパ
- 2, ニンジャブロ
- 3, サンタコ
- 4, スエタ
- 5, ゴンジロウ
- 6, ムイチ
- 7, シジゴロウ
- 8, ハチグロ
- 9, クジヤマ
- 10, ジユウベイ

以上であるが、嘉瀬言葉特独のニュアンスで心よく耳に入り、自じと数の流れになっているから不思議である。ついでに失礼ながら、そのアダ名の家を紹介させていたぞく事をお許し願いたい。

- インパ (昭和町、浜田永助宅、今は不在)
- ニンジャブロ (昭和町、鳴海幸之助宅)
- サンタコ (下派立、広瀬湯屋)
- スエタ (昭和町、蛸島亮一宅)
- ゴンジロウ (後町、山中伊次郎宅)
- ムイチ (上古町、木下無市宅)

- シジゴロウ (下古町、斉藤岩次郎宅)
  - ハチグロ (畑中、鳴海勝雄宅)
  - クジヤマ (小栗崎、伊藤一龍宅)
  - ジユウベイ (中派立、阿部重造宅)
- そこで私も茶目ッ気を出して、以上列記の外のアダ名を頭にして教え方を試みてみた。御笑覧下さい。
- 1, イツボ
  - 2, ニダオジ
  - 3, サンチョウ
  - 4, シロウ
  - 5, ゴデサマ
  - 6, ムサシ
  - 7, シジヤム
  - 8, ヤソ
  - 9, クロヘイ
  - 10, ジユツケ

例によって、アダ名の家を紹介すると。

- イツボ (下鍛冶町、沢田薫宅)
- ニダオシ (昭和町、白川榎五郎宅本家)
- サンチョウ (後町、沢田政孝宅)
- シロウ (新誠町、木下正義宅)
- ゴデサマ (車町、木下竹男宅)
- ムサシ (下鍛冶町、吉崎新一宅)
- シジヤマ (昭和町、工藤英越酒店)
- ヤソ (後町、須崎悠悦宅)
- クロヘイ (車町、黒川平内宅)
- ジユツケ (昭和町、沢田修治宅)

二番煎じであるので、比較的最近ついたアダ名も多く含まれている事は否めない。アダ名の由来は、それぞれ何代か前の先祖の当主の名を冠して、そのまま呼ばれ、それが津軽弁に訛ったものが大多数のようである。良きにつけ悪しきにつけ、アダ名を書かれた御家族には深くお詫びをして擲筆する。



# 嘉瀬と金木 反目二百年

## 秋 元 惣之進

約、六四二年前の興国五年（一三四四）に、朝日左エ門尉行安（藤原景房）が、飯詰に高楯城を築城したが、三年後の興国八年八月（六三九九年前一一三四七）に、家臣の嘉瀬光明宗範に嘉瀬山にも（お城山）支城を築城するよう命じた。

又、朝日左エ門尉は、浪岡城主、北畠頭村の幕下で、頭村は北畠親房の子孫とも伝えられ、今から約六〇八年前の天授四年※（一二七八）に、浪岡を拠点に附近一帯を支配していたが、天正六年七月（四〇八年前一一五七八）、大浦為信に依って浪岡城が滅ぼされた。飯詰高楯城主 朝日左エ門尉行安は、大浦為信に抵抗すること拾数年、其の間に、数回に渡り大浦為信の攻撃を受けながらも、「節に屈せず」孤立無援の辺境にありながらも、大浦為信軍勢を撃退したが、天正七年（四〇七年前一一五七九）再度、大浦為信の軍勢は、岩木川を下り、高楯城を正面攻撃、これに抗戦すること数年と言う持久戦に入ったが、最後迄、抗戦し敗退させた。

飯詰城主の家臣 三上定之亟は兼てからの大浦為信軍の再度の攻撃を余知し、嘉瀬城小田川城（木良市）金木城主 津島右エ門太郎義栄等に、「加勢」を依頼してあるも、金木城主 津島右エ門太郎義栄 大浦為信に「寝返り」して、高楯城主 朝日左エ門尉行安（藤原景房）を裏切った。



館 東 瀬 嘉  
の 実弟 三浦光兼定幸を萩元川に（嘉瀬と金木の間の川ユ）配し、幟を立て家臣拾数名 騎馬数頭を配備、防戦体制を整えたが、天正拾五年（四〇四年前一一五八二）裏切者の津島右エ門太郎義栄は、大浦為信軍の助勢を得、総力数拾名の軍勢で攻撃、萩元川で防備体制の三浦光兼定幸軍勢に不意を打ち敗退させ、金木軍勢は、更に嘉瀬西館、東館へと二軍に別れ、一気に嘉瀬東西両館を滅亡（ぼろぼろ）さんと

猪突猛進、攻撃したが、これを迎え打ち嘉瀬東西両館の三浦権十郎、浜館三郎永光等は、身体に鎧、兜を身に付け必死に防戦、金木軍勢を遂に撃退させたが、又もや裏切者の金木城主 津島右エ門太郎義栄は、大浦為信の助勢を得て、五百余名の軍勢で嘉瀬城を攻撃、この時、嘉瀬城の兵力二五〇名の内、嘉瀬城に百五十名、小田川城に四十名、嘉瀬東館に二五名、西館に三五名、騎馬拾五頭で応戦、嘉瀬城主 光明宗範 並に浜館永光 三浦重考等は勿論、他の百五拾名も、必死に防戦し、金木軍勢五百余名、多勢に無勢なるも小田川の八重や佐助と共に、金木軍に夜襲や奇襲攻撃をかけ、又、枯野原に火を放ち、嘉瀬城は城こそ「小なり」と言いども、城主の嘉瀬光明宗範「寄略縦横の知将」なりと、嘉瀬軍勢は金木軍勢に横合から突如に襲いかかる。此れを迎える金木軍、嘉瀬軍勢は特意の「弓で火を放ち、石つぶを投げ、枯野原に火を放ち」金木軍勢を遂に敗退させた。それから五年後の天正拾五年五月（三九九年前一一五八七）、大浦為信は尻無（五所川原）に本陣を置き、又、新城城番 阿部孫三郎 新城より山越えして嘉瀬城を背後から攻撃、北西からは裏切者の金木城主 津島右エ門太郎義栄軍勢が総攻撃を開始した。

当時の嘉瀬の人口は知るすべも無いが、一人残らず参戦、金木軍勢、並に新城軍勢と激しく戦ったが、十重二十重に囲まれ、多勢に無勢、奪戦虚なく、遂に天正拾五年五月二日（三九九年前一一五八七）、嘉瀬東館 西館 小田川城が炎上、嘉瀬も哀れ落城、嘉瀬領民の大半は城と共に枕を並らべ討死したと伝えられる。

又、嘉瀬光明宗範 落城寸前に妻子を黒石方面の山奥の隠れ里に預け、宗範は再起を願ひ、拾数名の従者と共に、越後（新潟）方面に落ちのびたとも伝えられている。

実弟、嘉瀬義裕も兄、光明宗範の一行に加わったが、憎悪に燃いた義裕は、裏切者の憎むべき金木城主 津島右エ門太郎義栄を、何時かは滅ぼさんと肝に銘ず、実兄 嘉瀬光明宗範と、断腸の思いで途中で別離して引返したが、中山山脈から西に流れる立山の裾野、現 観音山の二ツ森頂上から、落城址（嘉瀬城）や嘉瀬集落を眼下に望眺したが、哀れ嘉瀬城は焼き払われ、神社や寺は勿論、土地や田畑は奪れ、家々は焼かれ、悲惨な状態だった。

又、津軽統一の野望に燃えた大浦為信は、遂に津軽を統一し、金木城主 津島右エ門太郎義栄は、其の勲功に依り、金木代官の身分を保障。それを見兼た実弟の嘉瀬義裕は、嘉瀬城と共に倒れた家臣や、生死を共に、金木軍勢と抗戦して戦死した、集落民の仇をと誓い、裏切者の津島右エ門太郎義栄への恨みを、何時かは晴らさんと、農民に姿をやつす、察知されない様に密かに、打倒悲願を胸に秘め其の機会を伺って、着々、計画し、集落民と一緒に、開墾に「力」を入れながらも、営々と準備を怠らず、勢力拡張に全力を蓄える事に専念集中したが、眼下の彼方には、嘉瀬と金木の間の川（萩元川）の障害と、金木軍勢の拡範囲で強固な体制が整えられ、金木軍勢を討つ迄はと全力を尽すこと数年、遂に其の「志」を遂げること無く、次第に年（年齢）老えると共に年月が遠ざかり、一戦を構える程の実力に乏しく、又、報復の一念に燃えた嘉瀬義裕（実弟）としては、死んでも死に切れない思いで無念の涙を呑み、邑人（村人）の繁栄を念じつつ、宿志を遂げ得ない無念の涙を呑み、邑人為、立山（観音山）の二ツ森の山頂で、遂に割腹したと言うが、邑人（村人）は慟哭の涙で二ツ森の山地は濡れたと言うが、今も埋葬の跡がある。



邑人は、荒廃した「邑」を復興する意欲も薄らぎ、金木領民を見ると振え上ったと言う。戦に敗れた嘉瀬の邑人は、金木領民の威武（権力と武力）には身動きも出来ず、只々、畏怖（恐れ怖がる）のみで、蛇に睨られた蛙であり、其の横暴振りには目に余る物があり、邑人は荒廃した邑（村）を復興する意欲も薄らぎ、貧寒と貧窮の、どん底に落ちいったが、金木領民は、救援の手を差し伸べる事も無く、次第に嘉瀬を疎遠し、一斉の交流も無く、其の間、二〇〇年と言う。長い年月が流れたと言ふ伝承があるが、其の間、金木は戸数も次第に増え、津島右エ門太郎義榮は、金木代官の地位を利用、嘉瀬の邑人の貧窮を返り見ず、金木館（城）を更に増改築し、金木館を、城の様に築いたが、津軽領民は金木館は「金の城の館」だと言ひ、唯れ言ふと無く「金城館」と呼んだと言うが、天正拾七年（三九七年前一五八九）岩木山の噴火で大地震があり、更に慶長二年（三八九年前一五九七）には、再度噴火、大爆發が元起り金城館（金木）にも石砂・灰などが降り、又、元萩禄七年（三一四年前一六七二）五月二七日の大地震と共に岩木山が大噴火、硫黄が噴出し、又もや、石・



砂・灰などが金城館（金木）にも降ったと言うが、天正拾七年から、元禄七年迄の間に、五回の岩木山の大噴火や地震があり、其の間に、金城館（金木）館は崩壊し、又、古田なども岩木山の噴火の降灰の為、大半が埋れた。

『今でも、ソデ柳、居升の水田を三尺位堀ると、昔の田圃の原形があり、水稲の稲株や藁などが出て来るが、当時の水田が埋没したのは、岩木山の数回の大噴火の降灰や、風化作用であると言う』が、天正年間津軽北限は茫々たる菅原の原野で、真享年間検地以前に開発された「田」を、古田と言ったが、其れ迄は、津軽藩では、他国に売る「米」は、一粒も無く、自給自足状態だった。又、岩木山の数度に渡る大噴火の降灰、打続く冷害、岩木川の決壊で、水田は冠水、相次ぐ大凶作で、農民は貧窮の「どん底」に落ち悩んだ。

四代藩主 信政は、津軽平野に新田開発をと、「肝」に命じ、又、農民の貧困を軽減し、領民の人心安定を誓い、北限の茫々たる原野に開墾開田をと、着々、基礎工事の構想を練り、其れには、岩木川の堤防・排水・溜池の築堤と、新田開発は大事業で、遠大、且、大規模な構想であったが、新田開発の一環としては、藩費では到底、賄え切れず、四苦八苦、苦慮したが、藩では、津軽半島の中山山脈の梵珠山の、神が授けた原生林、神木山の森林（注、往時には金木を神木と呼んだとも言ふ）松葉を伐採し、他国に売り、新田開発の財源念出にと考慮、即刻、各地から人寄を集り、特に金木組（拾八ヶ村）からは、杣夫や、其の他の人夫を雇入れ、杣夫や人夫小屋を建て、寝泊りして、松葉を伐採し梵珠山から萩元川へ流れる川を、途中で水門状体に木柵で止め、川の水を満水に溜め、松葉材を水門迄で流し込み、堰止めた川の一ヶ所に、数百石の松

葉材を集結して、一度に放水、水の勢力で松葉材を萩元川の河口迄で流し、河口には、材木奉行の番所があり、役人達は、厳重な検査の上、岩木川から十三瀉に集散地を設け、十三瀉で筏を組み、海上運行、幕府には、津軽の良材、松葉を献上し、又、江戸・京都・大阪・加賀・若狭などにも販路を拡大したが、松葉は、各地からの注文が殺倒した。四代藩主 信政は、津軽新田開発の大きな財源の神木の松葉材の売りに満顔となり、神木の松葉材は、金の木だと褒め賛いたと言ふが、唯れ言ふと無く、「神木」を「金木」と呼ぶ様になり、現在の金木の地名の由来が出来たと言ふ伝承がある。

何れにしても、津軽新田開発の大事業は、金木山の原生林、神が授けた松葉材が、新田開発の財源の宝庫だったと言う。

（萩元川は、往昔には、川幅が広く深く急流だったが、岩木山の数回の大噴火と、風化作用で小さな堰になった。又、嘉瀬と金木の間の川は、往昔には萩元川だったと言う。）

又、松葉材事業や、新田開発事業に当っては、特に金木組十八ヶ村の内、嘉瀬・木良市からの杣夫や、人夫の応援を得た。藩や、代官所、金木領民は、次第に嘉瀬に宥和（不満だが大目に見て仲良くする）を持ち始め、嘉瀬と金木は、松葉の伐採や、津軽新田開発事業で、次第に交流を持ち始め、融和をいだいて来たが、新田開発事業には、家臣や小禄の足軽連を地方に在任せしめ、其れに伴って、家臣・足軽連には、土地・山林・家や田畑を与え、此れが、後に富豪となり、小作人を絞り取った。何れにせよ、津軽新田開発事業は、偉大な英知と、此処に吾々が生存しておる事は、先人の艱難辛苦の賜りであり、新田開発事業を偲ぶ時、往時の人々には、只々平身低頭のみである。

尚『嘉瀬と金木』

の稿を綴るに当り、金木郷土史編集委員 長をされた白川兼五郎先生より、お力添を賜った事に対し、深甚なる敬意を表します。

※ 南北朝時代の年号で天授四年（一三七八年）は南朝（長慶天皇）で、北朝の年号は永和四年（後円融天皇）である。



阿部按摩師笑話

煮ると焼く

嘉瀬話

権四と三太が、道でばったり合った。  
 「三太や、三十五で嫁に死なないで、しげねべ（寂しいだろう）」  
 「ん、先の嫁サ、似た女ゴほしいじゃ」  
 「似た女ゴ捜してみるね」  
 それから一カ月程終って、権四が三太のところへやって来た。  
 「煮た女ゴだばネバテ（無いが）、焼けた女ゴだば、あるじゃ」  
 三太が隣村から貰った後妻は、顔に火傷の傷あとがある女であった。